

受付番号

留学・研究計画書

氏名 神野知恵	留学機関名 全南大学校 芸術大学大学院 国楽科
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2013年3月～2014年2月
研究テーマ 湖南右道農樂の公演芸術化 —女性農樂団・羅錦秋カラクと高敞農樂カラクの比較—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>農樂は朝鮮半島南部に伝わる民俗芸能で、打樂器の演奏とともに舞踊や隊列の変化などが繰り広げられる。この芸能は農村、漁村などの民衆によって伝承され、農事暦や歳時風俗に基づいた村祭りの場で演じられてきた。中でも全羅道の平野部で伝承される湖南右道農樂は、世襲の巫家(シャーマン)出身で音楽を専門とする男性樂士たちが村祭りに参加していたことなどから、非常に洗練された技巧的な演奏スタイルが見られる。本研究の主題は、この湖南右道農樂の「公演芸術化」である。現在、全国で伝承されている農樂のなかで儀礼的な村祭りの農樂として原型を留めているものは数少なく、大部分の地域では近代化に伴って、観客に見せる公演としての姿へと変化している。「公演芸術化」というキーワードを設定することでこの事実を再認識し、そこにどのような音楽的变化があったのかを記録することで農樂というジャンルを改めてとらえ直したいと考えている。</p> <p>とくに1950年代から70年代にかけて、これまで男性の世界であった農樂において、初めて湖南右道農樂の若い女性奏者によって「女性農樂団」が結成され、全国各地での公演は一世を風靡した。この女性農樂団のサンスェ(奏者のリーダー)として活躍してきた羅錦秋(ナ・グムチュ)氏は若い頃に全羅道の世襲巫家出身の男性樂士らに教育を受け、彼らと共に演奏してきた経験を持つ最後の世代の名人だと言える。湖南右道農樂の繊細で多彩な芸風を受け継ぎ、さらに舞台経験を積み重ねるうち、試行錯誤を加えて自分の演奏を作り上げてきた人物だという点で、「公演芸術化」という主題を考えるのに最も適した対象者である。また現在70代後半になる羅錦秋氏が活発に演奏活動を行える間に、早急に調査を行う必要がある。調査では、この羅錦秋という個人の奏者が持つあらゆる特徴を多面的に把握する。例えば、奏法、音色、カラク(リズムパターン)の種類とつなぎ方、バリエーション、身体表現、他の奏者とのコミュニケーション方法などと、それらの特徴を生み出している要因を分析し、客観的に記述する。これにより、彼女が長年舞台で磨き上げてきた公演農樂の音楽的特徴をとらえていく。</p> <p>また、申請者は2006年から全羅北道の高敞農樂伝授館で参与観察を行ってきた。高敞農樂の復興に尽力してきた黄圭彦氏をはじめとする元老演奏者たちが次々と亡くなるなかで、農樂保存会の若い伝承者たちは2008年頃から羅錦秋氏のもとを訪れ、定期的な伝習と、共同公演などを行っている。彼らが高敞出身ではない羅錦秋氏に師事する理由の一つは、羅錦秋氏の先々代の師が高敞出身の人物であり、羅錦秋氏と高敞農樂のカラクが近い文脈を持つためだ。しかし高敞農樂カラクは、村祭りの現場での演奏を中心に発展してきたものであるため、羅錦秋氏のカラクと異なる部分も多い。改めて二つのカラクの特徴を比較することで、その音楽的な相違点と共通点から、公演芸術化を探ることができると考える。単に二つのカラクを記述し、報告するだけに終わらない分析と考察が必要である。</p> <p>本研究のような、外国人研究者による韓国地域文化研究、特に民俗音楽・芸能研究は非常に少ない。現地調査に根差した本研究によって、韓国の地域民俗芸能を日本や世界の学界に発信することが可能になり、また、韓国人研究者にとっても新たな視点を提供できると考えている。</p>	

成果報告書

記入日 2014年 4月 25日

氏名 神野知恵	留学先国名 大韓民国	所属機関 全南大学校 芸術大学国楽科
<p>研究テーマ：湖南右道農樂の公演芸術化 —女性農樂団・羅錦秋のカラクとその継承— (※ 申請時の副題「—女性農樂団・羅錦秋カラクと高敞農樂カラクの比較—」から変更)</p>		
<p>留学期間 : 2013年 1月 ~ 2013年 12月</p>		
<p>本研究の概要</p> <p>【キーワード：農樂／女性農樂団／公演芸術化／個人史／個人奏者の役割と影響／演奏分析／農樂の継承】</p> <p>「農樂（プンムル）」は朝鮮半島南部に伝わる民俗芸能で、太鼓や鉦などの打樂器を身につけて演奏しながら舞踊や隊列の変化など繰り広げる総合的な芸能である。農樂は村落共同体の祭りの芸能として伝承され、歳時風俗に基づいて演じられてきたが、日本統治時代を経て競演大会出場、興業演奏を行うなど公演芸術化が進んだ。中でも全羅道西部で伝承される湖南右道農樂では1950年代から70年代にかけて、これまで男性奏者しかいなかった農樂の世界に女性奏者を中心とした興業的な演奏集団「女性農樂団」が登場し一世を風靡した。本研究ではこの女性農樂団の主要演奏者である羅錦秋（ナ・グムチュ）名人の個人史と演奏分析、そして羅錦秋農樂の現在の継承の問題に注目することによって、この個人の奏者が近現代の農樂史の中で担ってきた役割や、現在と今後の農樂に与える影響について考察する。</p> <p>※申請時は「高敞農樂」の音楽的特徴との比較研究を主題にしたが、1年間研究していくにつれ、羅錦秋の教育活動に着目することになり、高敞農樂との比較分析は副次的な要素として扱うことにした。</p>		
<p>研究の経緯</p> <p>2007年から農樂の伝習施設である「高敞農樂伝授館」（全羅北道高敞郡）に通ううちに、ここに所属する若手のプロ演奏者たちが、隣接する扶安地域の農樂文化財保有者である「羅錦秋」という女性の名人（全羅北道無形文化財7号扶安農樂技能保有者、1938年生まれ）に習っていると知り、関心を持った。2009年からは高敞農樂伝授館に所属するプロ奏者たちを中心として羅氏の農樂の研修合宿が行われるようになり、これに参加したのを契機に博士研究の主題とするに至った。2013年度およびその前後に行った調査・研究は、2015年度に提出予定の博士論文の基盤になる。</p>		
<p>研究の方法</p> <p>先行研究が非常に少ないため、関連する文献の調査に加えて現地調査（参与観察、インタビュー等）が主な研究の方法となった。また滞在中は各分野の研究者、演奏者らとも意見を交換した。</p>		

2013年の主な現地調査スケジュール

羅氏が活動する扶安地域、高敞地域、また弟子の集団である「錦秋芸術団」での教育活動に参加し、その間の全ての公演を撮影記録した。合宿練習の度に寝食・練習などを共にしながら、演奏技術や羅氏の個人史などについてインタビューを行った。また弟子と羅氏との年中行事（記念日イベントなど）、羅氏の個人的な活動（農楽大会の審査、日常の農作業など）にも同行し、これは羅氏の人柄や芸術的な価値観、周囲の人物との関係などを理解するのに役立った。その他、比較対象となる他地域の農楽の伝承現状について、任実筆峰農楽・裡里農楽その他で現地調査を行ったり、農楽関連の公演やイベントに参加した。

現地調査から得た研究結果

羅氏の個人史や女性農楽団での活動に関しては既に文献やインタビュー記録があるため、これを正確に年表化し、今後本人に再確認しながら記述を重ねていく予定である。その他現地での調査は多岐に及んだが、滞在期間中とくに注目したのは氏の演奏スタイル、教育の現場の様子、「羅錦秋農楽」の継承の問題である。

① 羅錦秋の演奏スタイル

羅錦秋の演奏スタイルは一般的にそのカラク（打楽器のリズム表現）が「洗練されている」「派手だ」「芸術性が高い」などと言われているが、なぜそのような考えられているのか、具体的なリズムの特徴を記述する研究はこれまでなかった。今回の公演や教育現場の調査を通して、その理由はリズムの正確さや装飾音の多さ、バリエーション展開の豊かさ、難度の高いフレーズの創造性などにあるということが明らかになった。しかしそれらは大衆にわかりやすいように簡略化されたのではなく、古来の農楽や巫俗リズムに由来する複雑さや深遠さも含んでおり、その特徴を弟子たちは「コチェ（古式）」と表している。日本統治時代やその直後の農楽を経験しているほとんどの元老演奏者を失った現代の農楽界にとって、こういった羅氏のカラクは最後の砦であるとも言え、これを求めて全国から様々な農楽奏者が羅氏のもとを訪れているということもわかった。弟子の1人である李性洙氏（イソンス、高敞農楽で活動するプロ奏者）から、自分が師匠に学んだカラクの詳細を記録しておきたいということを伝えられたので、1か月ほどかけてこれを録音・録画する作業を共に行った。この作業は、羅氏のカラクについての李性洙氏の解釈を知る良い機会になった。

② 教育の現状

扶安在住の羅錦秋氏とその弟子のイチョロ氏を中心にしたチーム「パラムコッ」（「風の花」の意）は、扶安農楽（羅錦秋農楽）を伝承する団体として公演・教育活動を行っている。この団体にはプロ・学生・アマチュア奏者を含む15～20名ほどのメンバーが常時参加しており、羅氏からの指導を受けている。夏季・冬季には一般公開の「羅錦秋農楽キャンプ」（研修合宿）が開かれ、全国からプロやアマチュアの農楽奏者たち、羅錦秋氏のファンなどが集まって合宿を行う。今回の滞在期間中、これらの全ての合宿と日常の練習会に参加してその一部始終を記録した。

また、隣の地域である高敞農樂ではプロ奏者たちが羅氏に教育を受けるようになってから10年ほど経つ。とくに高敞農樂保存会長の李明勲氏（イミョンフン、女性）が中心となってプロの弟子の団体「錦秋芸術団」が結成され、扶安のイチョロ氏をはじめ、全国各地で活動するプロ奏者たちをメンバーにして年に数回集まって練習・公演を行っている。

これらの合宿・日常の練習などを通して羅氏のコーチングスタイルを見ると、プロ奏者とアマチュア愛好者を分け隔てなく受け入れ丁寧に教授し、特に初心者には、背面から手を差し伸べて手首やバチの使い方を直接感じさせるようにしたり、デモンストレーションなどを繰り返し示し、理解しやすいように教える姿が見られた。ただしカラクの高いため学習者がこれを再現するのは非常に困難である。また、相手がプロ・アマ如何にかかわらず非難や批判よりも称賛で人を育てる傾向にあることがわかった。

羅氏は全羅北道の道立国楽院（全州に位置する）において長年アマチュアに教えてきたこともあり、固定的な弟子が育たなかったが、ここ数年地元である扶安「パラムコッ」やプロの弟子集団「錦秋芸術団」での活動が活発に行われている。

③ 羅錦秋農樂の継承の問題点

2010年から現在に至るまでその教育現場を観察していくうちに、「羅錦秋農樂の継承の問題点」が様々に明らかになった。第一に、「地域農樂」との摩擦が挙げられる。羅氏をはじめとする女性農樂団出身の主要な奏者は、1970年代の女性農樂団の解散後にそれぞれの主な活動地域であった扶安・井邑・求禮などに散って地域の無形文化財保有者に認定されて伝承を続けている。しかし女性農樂団は元来、地域を越えたプロの放浪演奏集団であったため、「地元の農樂人たち」と女性農樂団出身の文化財保有者との間に摩擦や葛藤があるため地方での活動に制限があることがわかった。

次に、団体農樂である農樂において個人の奏者の芸の特徴を受け継ぎ、その名前を冠した団体を運営していく限界、難しさが挙げられる。言い換えるならば、「高敞農樂」や「扶安農樂」といった地域の名前を冠した農樂団体では、その芸風に厳密な規定が与えられるわけではなく、リズムや踊り方に「正解」があるわけではないので奏者それぞれの多様性が認められるが、「羅錦秋農樂」を理解し継承する団体においては、羅錦秋がいる限り本人の芸が「正解」なのである。これは師匠本人の意思によるものではなく、むしろ韓国の伝統音楽の傾向からしても、師匠は弟子たちの多様性やオリジナリティを認め、それを望む部分も大きい。その点からも個人奏者の芸を厳密に継承していく団体の存在意義というのは矛盾や葛藤を抱えていると言える。

しかしそれでも、先述のように羅錦秋の農樂、そのカラクは現代の農樂界において非常に貴重な価値があり、これを学ぼうとする若者は多く、依然としてその伝承活動は非常に躍動的で創意的であると言える。こうした女性農樂団の個人の奏者と弟子たちの活動が、今後の農樂史の発展に影響を与えるであろうことが予測される。

現地調査の活用

本研究を基盤に2015年度に博士論文を提出予定であり、本年度および来年度は、現地調査を通して得られた羅氏の演奏スタイルの分析と視覚化作業、個人史の整理、継承問題の議論を展開させていく。

留学全般について

2013年の1年間は、これまでの韓国での交換留学や短期滞在とは全く異なり、調査対象との深く濃い関係性と経験を得ることができた。まず、正式な所属は全南大学校国楽科（全羅南道・光州広域市）にいたが、基本的にはフィールドワークの現場である高敞農楽伝授館（全羅北道・高敞郡）で過ごす時間が大半だった。高敞郡（こちゃんぐん）という地域はソウルから高速バスで3時間半ほど南下したところにある西海岸に面した田舎町で、高敞農楽伝授館はこの地に古くから伝わる農楽を伝承する施設である。私はこの施設の一部屋を借りて1年弱の間生活させてもらった。伝授館には7名の常勤講師（職員）がおり、彼らは農楽の打楽器のプロ奏者でもありその教育者でもある。伝授館には夏・冬休みのシーズンにはソウルなどの都市から農楽サークルの大学生たちが大勢集まってきて賑やかに練習合宿を行い、その他の期間は、伝授館講師たちが自分たちの舞台公演のリハーサルを行ったり、師匠である羅錦秋氏（私の研究対象である人物）を招いて稽古をつけてもらったりしている。私が伝授館を生活の場所にしたのは、伝授館講師たちと師匠の羅氏の伝承活動のすべてに密着取材するためであった。実際に伝授館講師たちと1年間の共同生活や、密度の濃い会話を通して現在の農楽伝承の在り方の一面に深く触れることができたと自負している。

博士研究のテーマである羅氏の研究のほかにも、伝授館の講師たちは地域住民との共同事業として、村祭りの活性化のための生涯教育なども行っており、こういった教育事業や村祭りに参加しながら村の農楽の伝承現状を参与調査してきた。さらに、2013年3月からは高敞農楽保存会の会員に加えてもらい、伝授館講師のほか、高敞郡出身・在住で農漁業などに従事する保存会員の方々と共に公演活動に参加することができ、2007年から今までの高敞農楽との関わりがより一層深化したのは大変大きな収穫であった。

ソウルでも地方都市でもない高敞という田舎に住んだことで感じられたことは多かった。伝授館は田んぼの真ん中にあり、高敞の市街地まで出るバスは1時間に1本しかない。都市では希薄な季節感覚を、高敞では肌で感じることができた。野山に咲く花や、「旬」の食べ物、窓から見える農作業の様子、人々の話題などは刻々と変わる。空模様や空気の匂いからは季節の変わり目がよく感じられる。夜はもちろん満天の星空。こんな暮らしをしていて、後で東京に帰ってめまぐるしい生活に戻れるのだろうか？と心配になるくらいにゆっくりした時間の流れに浸ることができた。季節の挨拶廻りに参加できたのも面白かった。伝授館講師たちは正月や秋夕（韓国のお盆）、また誕生日などの記念日に羅錦秋氏や高敞農楽の先代の亡き先生方の家族らに贈り物を持って挨拶に回る。公演や教育という公的な師弟関係の他にこういった私的な関係性にもふれられたのは長期滞在研究者の特権だと感じた。全羅道のこうした季節感や風土の中に農楽という芸能が豊かに育ったということを感じることができたことは、研究者としてかけがえのないフィールドワークの成果であったと思う。

ただし、フィールド（常に大音量で打楽器の練習が行われている施設）の中で生活と研究の全てをこなすことの難しさに悩み、2013年後半の数か月は研究の整理作業のために全州（高敞から車で1時間半ほどの距離にある都市）に転居して暮らした。その間、韓国内にいななければ出会わなかつたらう人々や文献、風景などに遭遇できたことは非常に有難いことだった。助成終了後の2014年1月以降も現地滞在を続け、本年9月末まで羅錦秋氏へのインタビューと教育現場の調査・整理作業を進める予定である。



羅錦秋氏のプロの弟子集団「錦秋芸術団」の春川での公演。
中央の赤いチョッキが羅氏、右隣で花笠をかぶっているのが筆者。
このときは演奏者として参加させてもらった。



扶安での羅錦秋農楽キャンプ。プロ・学生・アマチュアなど様々な人が
羅錦秋氏の農楽を学ぶために集まる。



羅錦秋氏(右)と弟子の李明勲氏(左)の個人レッスン風景。